10.火の夢

悪夢龍レムナスの<仮面>の侵攻は静かに始まった。
最初は、ちょっとした口論だったり、街角の喧嘩であったり、自分の周りの世間が少し騒がしいかと思える程度の変化だった。それが次第に、住む場所であったり、仕事であったり、種族が違うもの同士が、もう誰も気にしなくなったような過去の諍いの記憶を掘り起こしたりして、対立し始めた。それでも、多くの人は、その空気の変化をあまり疑問に感じていなかった。
普段の生活の中にありふれた、ちょっとした失敗や意見のすれ違いに対して、いつもより少しだけ苛立たしく感じ、怒りを吐き出し、ぶつけることは快く感じられる。生きていれば、誰でもたまにはそういう気分になることはあるものだ。しかし、そんな気分が不自然に長く続き、しかも沢山の人間が一度に同じ感情に囚われている。そして怒りを発散することの心地よさに、たまにはこんな鬱憤の晴らし方も悪くないかと、少しずつ諍いの波に飲み込まれていくのだった。
<ゼオルラの首>の一件に通じるものがあると、ずっと調査を続けていたJBなどはすぐに気が付いた。龍の血の気配を鋭敏に感じるアズリアにはもっとあからさまに感じられた。レムナスの<仮面>が、人々の心に小さな悪夢を振りまいている…！
このまま広がっていけば、いずれもっと大きな争いや、国同士の戦争にすらなるかもしれない。そのやり口が、いかにもかれらしいのだった。おそらくかれは、滅びを望んでいない。中途半端に憎み合い、傷つけたり殺し合う。生かさず殺さず、悲しみに暮れながらも争いをやめることができない様を、永遠に眺めているのが、望みなのだろう。そんな風にしか、慰めることができない、寂しく不安な心…

止めなくてはならない。冒険者たちは行動を開始する。

敵の居所を突き止めるために、プクランド大陸に棲む最後の太古龍、楽龍イッポリトを、ポポリアきのこ山に訪ねた。
レムナスの<仮面>は巧妙に姿を隠していて、手当たり次第に探してもらちが明かない。そのことを他の太古龍に相談すると、危険だが、あえて向こうの悪夢に乗ってみることを提案された。物理的には見つからなくとも、かれは夢の中であらゆる人の心とつながっている。それを手繰って接近していくことは可能なはずだった。
具体的には、かつてソウラをRPGの世界に送り込んだ要領で、作り出した仮想世界を、レムナスの夢の世界に同期させ、潜入し、夢の中から攻略するというものだ。だがホルヘイズ曰く、彼らが使う「RPGの呪文」は調和を重んじ、レムナスの夢とつなげた場合、向こうの設定したルールと妥協して、ソウラたちに不利な世界になってしまうかもしれない。もっと、こちらの主張を強行にぶつける世界観でなくてはならないのだ、なんかこう、ロックな感じに…！！

（一抹の不安）

しかして、楽龍イッポリトはロックな野郎だった。ポポリアきのこ山の奥地、濃い胞子の霧が視界を閉ざすなか。その向こうから、激しいドラムの音とともに響き渡る声が、冒険者たちに告げた。「オレ様のライブに参加したいなら、てめえらのロック魂でその霧を吹き飛ばしてみせなァ！！」この無茶ぶりに、しかし、もう五回目となる冒険者たちも慣れたもの。ユルールやマリクあたりが苦戦したくらいで（彼らのデスボイスを想像してほしい）、レムナスの悪夢の影響もあって鬱憤のたまっていた一行は、おおむねそれをぶちまけたらOKが出た。そう、怒りも憎しみも、人が動物として持っている自然な感情であって、それはそれで生きるために必要だから発生したのだ。無理に封印したり、無視しようとする方が不健全なのである。きちんと理解して、上手く付き合って行かなくてはならない。怒りや憎しみを吐き出してもいい。暴力をぶちまけてもいい。それすらまとめ、からげて、痛快でどハッピーなハーモニーにでっち上げちまうのがロックなのさァ！！というのはイッポリトの談。一行のロック魂を認めた彼は快くソウラたちを送り出してくれた。

ソウラたち、JB一味、ユルール一行、マルチナとお供、イシュマリクと狛犬たち。夢の世界の中を五つのパーティーが進む。イッポリトの作り出した仮想世界は彼らの記憶を継ぎはぎして作られており、今までの冒険で訪れた場所や、冒険者になる前に思い出深い体験をした場所を通り過ぎ、これまでの旅路に思いを馳せたり、仲間たちの意外な過去を垣間見たりして、これからの戦いが、自分たちの旅路を結び付けた一つの大きなクエストの総決算になるのだと、心を新たにするのだった。
丁度ウェナ諸島の、ルシナ村を通り過ぎたあたりで、急に空が暗くなった。見上げると、眩しかった太陽の色が反転して、真っ黒な穴のようになっている。よく見ると、そこには無数の赤黒い腕の群れが、おいでおいでをするようにうごめいているのだった。
おそらくはそこがレムナスの悪夢との結節点なのであろう。ここまではイッポリトの作ってくれた健全な世界が、一行を守ってくれていた。あの向こうは敵の領分。どんな悪趣味な不条理が待っているかと覚悟を決めていた矢先、頭上の黒い太陽から腕が溢れだした。黒いしみが爆発的に広がって、天幕のように空を覆い、たちまち辺りが暗闇に包まれた。いや、空そのものが降りてきた？あるいはこちらがあの黒い太陽に引き付けられたのか…！？
黒い腕の奔流が冒険者たちを押し流す。暗くて何も見えないのか、あまりにも真っ黒な何かが見えているのか、判別もつかないままもみくちゃにされて、気が付くといつの間にか地面に足がついていた。だんだんと、目が慣れてくる。闇であったものが、見えてくる…。
流されているうちに他の仲間とはぐれてしまったのか、ソウラは一人でルシナ村の岬の上に立っていた。仲間…？仲間なんて、いる筈もない。だってソウラはまだ5歳か6歳のほんの子供で、先日嵐の海で両親を失ったばかりなのだ。ソウラは父と母が帰ってこなかったルシナ村の沖に沈んでいく夕日を、ずっと、眺めている…

レムナスの<仮面(ペルソナ)>は、罠を張っていた。
自分に近づくすべは限られている。他の太古龍の助力があれば、こちらが張り巡らせている悪夢の糸をたどってくる方法も、十分に考えられた。それを遮断することは、同じ<仮面>同士ではできない。だが、太古龍同士は争わないという彼らのルールを守るなら、やってくるのは太古龍自身ではない。いつものあの連中だろう。
であれば、迎え撃てる。なにしろ、かれもまた、ソウラたちの<物語(ドラゴンクエスト)>をずっと追ってきた、観客の一人なのだ。かれは夢想し、コーディネートしていく。何が少年たちを冒険の旅に駆り立てたのか。何が彼らを挫折から支えたのか。どのきっかけ(フラグ)を消してやれば、彼らの歩み出しを止めることができるのか…

ソウラは今日も、岬にうずくまって、夕日を迎えていた。自分は旅立たないといけないはずなのに。自分を嵐の海に残して、波間に消えていった父と母の、あの最後の目の光の意味を知るために…。だけど、怖いのだ。自分の親は、いうほど自分のことを愛していなかったかもしれない。もしもそんな結論しか得られないような旅になるなら。最初からしない方がいい。なあなあにしたい。ずっとけだるい夢を反芻していたい…。
なにか、自分の背中を押してくれたものがあったような気もしたのだが。若い憧れを吸い込んでいくような、深い深い、青い…青って、どんな色だったっけ。辺りは夕日に染め上げられて、一面セピア色の世界。その夕日も、もう、水平線の向こうに沈んでいこうとしている…。

ギブは、目を通していた図鑑を放り投げた。ずっとそこで紹介されている世界に憧れて、いつか本物を目にすることを夢見ていたが、そんな世界の果てに、箱入りの自分なんかが行けるはずもない。誰かが自分を連れ出してくれたら、きっかけを作ってくれたら、もしかして…。けど、世の中そんな都合よくはできていない。夢の見過ぎは心に毒だ。この本も、もうしまってしまおう。

いつまでたっても自分のネタで誰も笑わせることができないうりぼは、すっかり腐っていた。自分は頑張ったはずだ。父の動きの細部まで観察して、かなりのところまで再現しているはずなのだ。少なくとも、稽古場での動きは…。きっと偉大な芸人である父の子である自分に対するやっかみがあって、それが笑いの障壁になっているのだ。ろくでもない客だ。偏見で役者をあざけることしか考えていないのだ。苛立ちが憎しみに育って、何か本当に大切なことから心が離れているような気もするのだが、止められない。誰かがちょっと、クスっと笑ってくれるだけでも、自分はそこに立ち戻れるかもしれないのに…

ユルールはいつまでたっても妹に再会できず、マルチナはずっと自分の気持ちに素直になることができない。JBは仇憎さに先生の夢を見失い、マリクはどんなに我慢しても一向に改善されない一族の生活に疲れ始めていた。

激しい徒労感と、倦怠感。

未来が、自分を否定するようで、足を前に踏み出すのが、怖い…！

かれは、悦に浸っていた。誰かの夢が挫けるさまは、いきがる若さの足をすくってやるのは、本当に小気味よく、何より、安心するのだ。未来におびえ、閉ざした孤独な心が、ほんの少しだけ慰められるのだった。
かれがコーディネートした世界には、焦がれても焦がれても、絶対にたどり着けないように、必ず未来が夢を裏切るように、シナリオが用意してあった。かつてソウラが追体験した<真の太陽>と<太陰の一族>の戦いが、悲劇でしか終われなかったのと同じである。しかも贅沢なことに、個人ごとにオーダーメードである。身のうちの命は動け動けと急かしてくるのに、前に進めないもどかしさ、不安、苛立たしさ…！ふつふつと煮え立つ情念は、やがて怒りに、憎悪に変わっていった。世界が、自分が、歴史が、未来が、何もかも疎ましい、壊して、燃やして、何もかもさっぱりしてしまいたい…！
同じようなうすら暗い情念の炎が、今のアストルティアに生きる人々の心の中にも灯っていく。かつて大魔王マデサゴーラが成そうとしたように、火の夢が現実を侵していく。逃れるすべはないし、する気にもならない。人の心にはいつだって未来への恐れが隠れている。ちょっと悪い夢を見せてやれば、簡単にかれのシナリオに嵌めることができた。

こんな火の夢を胸に抱いて生きているのは、つらすぎる。誰かを同じように焼いて、少しでも、楽になりたい。澄んで、遠くを見ていた少年たちの瞳に、赤黒い炎が宿り始める。暗く、暗く、未来が閉ざされて行く。憎い、憎い…。

憎い…！！！

憎いにくにくにくにくにくにへにくにくにくにくにくにくニクニクニクニクニクニクニクニクニクニク…

「なーにこんなしょぼくれたとこでうずくまってんのよ」

「俺たちのクエスト手伝ってくれるって言ってたじゃんか。ほら行こうぜ！」

「そんな目、ソウラさんらしくないですよ、さあ、手を出してください」

未来に出会う誰かが、少年たちに手を差しのべていた。

アストルティアの冒険者たちは、用意されたシナリオだけに諾々と満足しているような連中ではない。

自分たちの物語を、自分たちの想像力で紡ぐのだ。そんな期待に胸を膨らませて、彼らは冒険の旅に出た。

「ギブせんせー元気足りてないよっ！？ほら乗った乗った！」
「まずは客を信頼しないと始まんねえっつったろうが。もうちょっとだ。場のノリに身を任せてみろよ」

旅の途中で道連れができ、街角の酒場で卓を囲んでは、野宿で焚火を囲んでは、夢を語り合えば、物語は何倍にも膨らみ、豊かになった。

「しけた顔してんなあ、名うてのJBさんもおセンチな気分に浸りたい時があるのかい？笑っちゃうね」
「ホッホッ、ユルールよ、何怖い顔しとる。いつものボーっとしたお前はどうしたんじゃ？そこがお前さんのいいところなんじゃろうが」
「まままマルチナさんのお顔に涙は似合いませんわっ！真のセレブは常に笑顔を忘れません事よっ！」

そんな風に花開いた夢が、今世界を支えている。

張りぼてのような悪夢に、挫くことなどできはしない…！

差し出された手を、ソウラは掴んだ。

どこまでもどこまでも続く砂漠を、エストリスは歩いていた。
砂嵐に吹かれ続けて、服は色あせ、ぼろぼろだ。父母と死に別れてから、ずっと一人。せめて与えられた命は全うし、繋いでいかなければならない。そう信じて世に抗い、屈服するということを何度も繰り返してきた。けれど、色々と失い過ぎて、もう限界だ。足がすっかり萎えてしまって、とうとう膝をついた。まあ、もうそろそろいいだろう。なかなか頑張ったんじゃないか？この砂に埋もれて眠ろう、そして砂そのものになって、誰も知らない風の中に消えるのだ…。

「アンタお人形になってまでも真面目ちゃんねえ、ちょっとは肩の力抜いてみたら？」

風鳴りの狭間に、知った声が聞こえたような気がした。

「貴方は貴方が思っているほど、誰かに何かを与えずに生きてきたわけではないと思いますよ」
「俺たちの冒険をあんだけ引っ掻き回してくれた奴がさあ、なに神妙になってんだよ、いつもの憎まれ口はどこいったんだ？」

薄暗い研究室の中、飛び起きて、右手を見た。人形ではない、血の通った肉の手がそこにあった。

「…アピー…？」